

## 歯周疾患に関する指標と齶蝕活動性試験項目との関連性

定岡直<sup>1)</sup>、川原一郎<sup>1)</sup>、八上公利<sup>2)</sup>、富田美穂子<sup>2)</sup>、笠原香<sup>1)</sup>、小口久雄<sup>1)</sup>、牧茂<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 松本歯科大学口腔衛生学講座、<sup>2)</sup> 松本歯科大学社会歯科学講座

キーワード：PMA、齶蝕活動性

**要旨：**若年層の歯肉炎有病率が改善しない実情を踏まえ、健康日本 21（第 2 次）における口腔保健の目標では、「20 歳代における歯肉に炎症所見を有する者の割合の減少」が目標値として設定されている。健康寿命延伸の為には高齢でも自分の歯を持ち続けることが QOL の維持に努めること不可欠である。そこで若年層を対象とし、歯肉炎に関する指標と口腔内環境を評価する上で歯科医院でも多く行われている齶蝕活動性試験と関連性があるかを調べた。その結果、視診による歯肉炎の評価値と齶蝕罹患のリスク評価値は関連が高いことがわかった。

### A. 目的

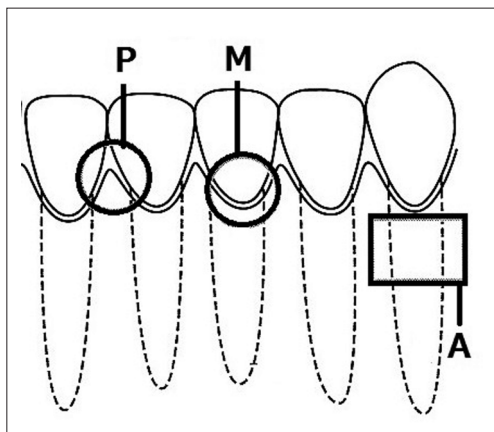
2000 年から始まり「歯の健康」とともに具体的な目標値が設定された健康日本 21 は 10 年間の最終評価を取りまとめた上で、2012 年に健康寿命の延伸と健康格差の縮小が盛り込まれた健康日本 21（第 2 次）として継続された。具体的な目標の 1 領域として「歯・口腔の健康」が新たな 11 項目の目標値とともに設定された。その項目の中に「20 歳代における歯肉に炎症所見を有する者の割合の減少」が掲げられた。直近の歯科疾患実態調査は小学生以降の若年層で歯肉炎の所見が有る者の割合が高い（15～19 歳 69.1%、20～24 歳 74.2%）ことが明らかとなっている。このような若年層における歯肉炎・歯肉炎患者の増加は、口腔保健分野において大きな注目を浴びている。一方で、齶蝕有病率は減少しているが、唾液による齶蝕活動性試験と歯肉炎との関連性は不明である。若年層の歯肉炎の罹患状態と口腔環境指標の関連性から歯肉炎予防を検討した。

### B. 方法

サンプル

有志の歯学部生 100 名（男性 65 名・女性 35 名）

PMA（歯肉炎の広がり）index



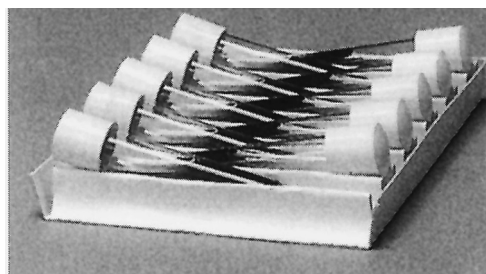
サンプルに対して口腔内写真撮影を行い、後にその写真から歯肉炎の広がり調べた。

上下顎前歯部の歯間乳頭部（P：gingival Papilla）、辺縁歯肉部（M：Marginal gingival）、付着歯肉（A：Attached gingival）の計 34 ヶ所を検査部位とした。炎症が見られると 1 ヶ所につき 1 点とした。

### ② 齶蝕リスク指標（齶蝕活動性試験）

#### (1) ミューカウント

齶蝕の原因とされる *S. mutans* を試験管内で培養した。検体として唾液とショ糖を含んだ液体選択培地を用いる。試験管内壁付着した菌数の数をもって口腔内に存在する菌数を評価する。



試験管壁に付着が認められないもの（-）

1～10 個の付着が認められるもの（+）

10 個以上の付着が認められるもの（++）

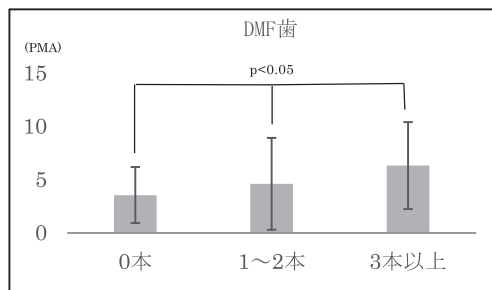
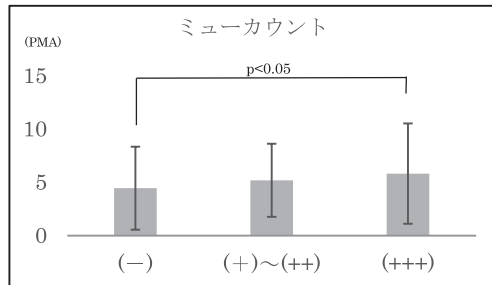
試験管壁一面に細かな付着がみとめられる（+++）

#### (2) DMF 歯数（齶蝕経験歯数）

齶蝕になったことがある歯の数を指す。D：未処置歯（Debris tooth）、M：齶蝕喪失歯（Missing tooth）、F：処置済歯（Fixed tooth）。平成 23 年度歯科疾患実態調査によると、15～19 歳で平均 3.2 本、20～24 歳で平均 5.9 本である。

### C. 結果

サンプルにおいてはミューカウントと DMF、2つの齲蝕リスク指標において齲蝕リスクが高いと判定されたグループは有意に PMA スコアも高かった。



### D. 考察とまとめ

今回の結果では、被験者の PMA スコアの平均は 4.8 と、健康日本 21 でも触れられているが、若年者を被験者とした本研究においても同様の傾向が見られた。本研究では歯肉炎と齲蝕数および齲蝕リスクの関連性が認められた。齲蝕になりやすい口腔環境は歯肉炎や歯肉炎にもなりやすい環境といえる。

以上のことから齲蝕リスクの指標として用いられている口腔内のミュータンス菌数の結果は歯肉炎のリスク指標として有効であり、齲蝕リスク検査を歯肉炎予防に活用できる可能性が示唆された。

### E. 利益相反

利益相反なし、または詳細を記載